
藍の魔術師と月の女神

高里奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藍の魔術師と月の女神

【Nコード】

N21820

【作者名】

高里奏

【あらすじ】

犯罪者の集う国、クレッシェンテで唯一の犯罪者、スペード・J・Aは「月の女神」の寵愛を受けた少女を探していた。彼女は時の魔女の愛する少女、黒い髪の少女だという手がかり意外は何も無い。スペードはただ、興味のみで彼女を探しているのだ。

スピード 主章？

クレッシェンテ王都ムゲツト。

雨の多いこの都は今日もまた雨が降りしきっていた。

そんな外の天気もお構い無しに、今日も酒場では昼間から男たちが集まっている。

「詐欺師^{エース}Aのお出ましだ！」

「カトラス^{エース}Aに勝てる奴はいるか？」

一人の男が入った瞬間、酒場は一層賑やかになる。

「おやおや、僕の噂ですか？」

「待つていたよ。スピード」

「それは光栄ですウラーノ。それで、今日は貴方も参加するのですか？」

「いや、私は見物だよ。君には勝てそうに無いからね」

「それは残念です」

スピード・J・A^{ジョアン・アンジェリス} 彼は詐欺師やいかさま師として人々に知られていた。

だが、それだけではない。

「スピード、それで、今日は何を賭けるんだい？」

「そうですね。地獄水晶^{ヘル・クォーツ}が手に入ったのですが、これでいかがでしょう？」

彼が賭けるものはいつも、正規ルートでは手に入らない魔術に関連深いものばかりだった。

勿論、クレッシェンテでは魔術は禁止されていない。だが、魔術師という職業は特に嫌われており、魔術と聞いただけで嫌な顔をする人間の方が多いことは確かだ。

「地獄水晶とはまた…随分と貴重だね」

「ええ、時の魔女と競り合って何とか落札しました」

「で？いくらになったんだい？」

「四千万リラでしたかね？まあ、これだけ上質なものにしては安く入りました。僕としては、なぜ時の魔女が諦めたのか理解できません」

スピードが言うとウラーノは笑う。

「仕方ないよ。時の魔女はもつと質の良いものをたくさん所持している。それに、時の魔女の関心は今や商売には無い」

「おやおや……では、彼女が見つかったのですか？」

スピードはウラーノを見つめる。

「私はそこまで知らないよ。ただ……時の魔女は愛しい少女を見つけたようだ。まあ、私には関わりの無い話だ。尤も、その少女が私の領地に足を踏み入れるとなれば話は別だけだね」

ウラーノが笑うとスピードは愛用のレンズを取り出す。

「そうですか。では、今日、僕と勝負してくださるのはどなたですか？」

スピードは酒場の人間を見回す。

「俺だ」

「俺も混ぜろ」

幾人かがスピードを取り囲むように席に着く。

「スピード、今日はそのレンズを使わずに勝負してみてもどうですか？」

酒場の一番奥の席から声が響く。

「……これはこれは……珍しい人が居ますね。セシリオ、どうしておつもりで？」

セシリオは微かに笑う。

「ここは僕の配下の店です。何も不思議ではないでしょう？」

「ええ、そうですね。それで？ 貴方も参加するのですか？」
「そうですね…まずは見物させていただいて、それからにしまし
うか」

彼の言葉により、その場の空気が変わる。何せ、小さな酒場に良く
も悪くも有名な三人が揃っているのだ。

「げ……セシリオ・アゲロまで出てきやがった……」
「こりゃ勝ち目無しだな……」

彼ら三人は何もギャンブルだけで恐れられているわけではない。

「セシリオ、久しいね」

「ウラーノこそ、最近はずっとも依頼もくれないじゃないですか」
セシリオ・アゲロ。恐怖の代名詞とも呼ばれる彼は、暗殺組織ディ
アーナのマスターにして、世界最強の暗殺者であった。

ウラーノ・ナルチーゾはクレッシェンテでは珍しいと言われる温厚
なナルチーゾの伯爵であり、ネウトウロ派の有名所だった。

「ウラーノは来なくてもなかなか来られないのですよ。なにせ、こ
のムゲットは激戦区になりやすいですからね」

「酷いなあ。そうしているのは大抵スピードだろう？」

スピード・J・A、カトラスAや詐欺師Aと呼ばれる彼は過激派反
乱組織リヴォルタの所属だと専らの噂だが、彼は常に否定している。
「僕がそんなことをするわけが無いでしょう？ 僕も、貴方と同じ
ネウトウロのつもりなのですがね」

「君は、リヴォルタだろうと宮廷騎士だろうと手を貸す。お陰で混
沌とした世界になっているよ」

「僕としては仕事が増えて嬉しいのですがね」

「私は迷惑だよ」

ウラーノは疲れ切った表情で困ったように笑う。

「セシリオ・アゲロは平和だろうと仕事が舞い込むでしょう？」

「国内外問わずにね」

二人が言うと、セシリオは照れくさそうに笑う。

「誉められると照れますね」

「誉めてませんよ。それより、貴方は時の魔女の愛しい少女の姿を見たのですか？フルハウスです」

スピードがテーブルにカードを広げる。

「ええ、例の少女の行方なら掴んでいますよ。相変わらず強いですね。いかさまは…まだしてないようですね」

「僕は、運も良いんですよ」

スピードは笑いながら金を回収している。

「全く、一度にいくら儲ければ気が済むんだい？」

「そうですね、前は一億でしたね」

さらりと言うスピードにウラーノはため息を吐く。

「これは、一度くらい負けたほうが良いのでは？ ああ、時の魔女には一度も勝ったことが無かったんだっけ？」

「煩いですよ。ウラーノ。あの魔女に勝てる者など居るのですか？」

「そうですねえ、世界で僕の奥さんくらいじゃないですか？」

「え？」

「この前、時の魔女がうちのアジトに来て色々と言言をしていたときにヴェントとドーリーが僕の奥さんとカードをやっていたので、時の魔女に勝負を挑んだんですよ。勝ったら今回の注文はタダにする、負けら二倍で買い取るといったちょっとしたゲームです」

セシリオの言葉をスピードは退屈そうに聞き流そうとする。

「どうせ一勝程度でしょう？」

「いいえ、圧勝の負け無しです。ドーリーは途中で飽きて眠ってしまいました、ヴェントは呆れていましたね」

「まさか…セシリオ・アゲロ、次は貴方の妻を連れてきなさい。僕も勝負を挑みます。このレンズを賭けてでも」

スピードにしては珍しく、真剣な表情を見せる。

「ダメです。僕の奥さんにそんな呪いのレンズを向けるつもりです

か？」

「ばれましたか」

「見え透いています。尤も、彼女もそれなりの対処は出来ますけどね」

話しながらもスピードは酒場の男たちからほとんど金を回収していく。

「スピードが負けないなら退屈だね。店主、スピタリス持ってきてよ」

「おや、ここでそんなものを注文して大丈夫なんですか？」

「あのくらいじゃないと酔えないよ」

「相変わらず化け物ですね。僕も同じものを」

セシリオの言葉にスピードは笑う。

「貴方も化け物ですね」

「下戸は黙っていなさい」

「おやおや、心外ですね。では、僕も同じものを頂きましょう」

ウラーノは本日何度目になるかわからないため息を吐く。

「…セシリオ、スピードを挑発しないでくれ。僕が迷惑するよ」

「おや、元は貴方がスピタリスなんかを注文するからいけないのでしょうか？」

「そこまで言うなら帰ろうかな。彼女を探したいからね。時の魔女の愛しい少女には私も興味がある。黒い少女を一目みたいと思うのは普通だろう？なにせあの時の魔女が溺愛しているのだからね」

ウラーノが笑うと、スピードはさして興味無さそうにカードを眺めながら「馬鹿馬鹿しい」と言う。

「見つけたところでどうするのです？」

「そうです。あの女が何を考えようと別になれわれには関係の無い話だ」

セシリオは不機嫌そうに言う。

「あの女」と呼ぶあたり、相当時の魔女が嫌いらしい。

「貴方がそこまで彼女を嫌う理由を理解できません」

「僕は、魔女や魔術師といった類のものが大嫌いなんです」

「これだから頭の固い男は」

スペードがやれやれといった具合にいうと、セシリオは不機嫌そうに、店主が持ってきた酒を奪い取り呷る。

「魔術師なんて人を騙すのが仕事だ」

「暗殺者も変わらないでしょう？」

二人の間に火花が散った気がしたのかウラーノは慌てて二人の傍から離れる。

「怖い怖い。君たちの傍に居ると発火しそうだ」

「ウラーノ、貴方も、いい加減にしないと森の中で首をつることになりますよ？」

「僕ならこの場で一撃で仕留めますけどね」

二人に睨まれ、ウラーノは微笑む。

「生憎、僕は不死身だからね。そうでなければネウトウロ派ではいられない」

「本当に、貴方ほど厄介な男は居ませんよ」

「お褒め頂光栄だよ。セシリオ」

つまらなそうに言うセシリオにウラーノは一枚のカードを投げつける。

「ついでに依頼だ。この女、邪魔なので始末してくれない？」

カードには女の名前と職業だけが書かれている。

「標的の写真は？」

「そんなものを持ち歩くわけが無いだろう？ 必要ならスペードに探させるよ。君は始末してくれればそれでいい」

ウラーノが妖しく笑うと、スペードは金を数えるのを止め、ウラーノを見る。

「僕にこの男の仕事に協力しろと？」

「ええ、金は払います」

「僕は、高いですよ？」

「いつものことでしょう？ スペード、いくらでやってくれますか？」

ウラーノは笑って、カードをスペードの方にも投げつける。スペードは指で挟んで捕まえた。

「好きな金額を書き込んで下さい」

ウラーノの言葉に、二人は呆れたような表情をする。

「これだから、貴方のような人間に金を持たせてはいけないって世間は言うんですよ」

「ウラーノの場合、世間の評判が良いだけたちが悪い。無駄に外面は良いですからね」

そういつつも、二人はカードの裏にそれぞれ金額を走り書く。

「金が無くなれば愚民共から搾り取ればいいと父上は教えてくれたが……民から搾り取るよりは反対勢力を潰して奪い取った方が楽だし、民の信頼を得ることに繋がるからね」

「相変わらず、嫌な男です。客としては最上ですけどね」

「いや、友人としてもなかなか楽しめますよ。敵には回したくないですがね」

「お褒め頂き光栄だよ、二人とも。随分安く動いてくれるようだね」受け取ったカードに書かれた金額を見てウラーノは驚いたようだ。

「ええ、別に金には困っていませんし、貴方なら現金を受け取るより、酒を貰った方が良い。どうせまたどこから上質なものを輸入して独占しているのでしょうか？」

セシリオが言うのと彼は笑う。

「貴方には敵いませんね。スペードは？ マウリヤの香ですか？」

それとも森羅の織物？」

「そんなところですかね。貴方は独自の貿易ルートを持っている。

それこそ、国王よりも良い品を仕入れられる。幻影香をお願いしますか」

スペードが笑うと、ウラーノはくすくすと笑う。

「難しい注文だなあ。時の魔女だって滅多に仕入れない幻影香だな

んてさ」

言葉では言つものの、彼はちつとも難しいなどと思っていないことがわかる。

「酒と香だね。解つたよ、仕入れとくよ。仕事はきつちり頼むよ。

店主、会計。釣りは要らないよ。この二人の分も一緒に」

ウラーノは店主に金貨を三枚渡して店を出て行く。

「良い友人を持ちましたね」

「ええ、ここで彼と会つと必ず支払いを済ませて行つてくれますし、仕事は回してくれるし、これで常に味方ならば文句は無いのですが」

「それは難しいでしょう。彼はどこにもつけないのですから」

それに、彼は一番リヴォルタに近い思想を持っているとスピードは思う。

「セシリオ・アゲロ、貴方、時の魔女の愛しい少女を知っているのでしょうか？」

「ええ、良く知っています」

「どこにいますか？」

「そうですね。彼女は月の女神に守られています」

そう、セシリオが答えると、スピードは納得したように頷く。

「成程、彼女はウラーノが思うような女性ではないということですね」

「ええ、間違つてもネウトウロなんかには入りませんよ」

セシリオが笑うと、スピードが回収した金をどこかに仕舞い込んだのか、山済みになっていた金は消え去った。

「それでは、僕もこれで失礼します。例の女の情報が必要でしたら、僕の店まで取りに来てください。生憎今日は鏡を持っていない」

「解りました。今夜寄りますよ」

セシリオが言うと、スピードは姿を消した。

アラストル 間章？

「アラストル、起きて起きて」

ムゲットにある一番檻樓のアパートメントの一室。そこはアラストル・マングスタの家だった。

玻璃は当たり前のように彼の部屋に窓から侵入し、昨夜の任務でくたくたに疲れ切ってベッドに伏している彼に容赦なく日光を浴びさせたたき起こした。

「玻璃……今、何時だと思ってる？」

「午前六時」

「俺がベッドに入ったのは午前五時だ。頼むからもう少し寝かせてくれ」

アラストルは呻きながら毛布を頭に被った。

「寝ちゃダメ！ 今日はサーカスが来るんだよ」

「んなモン一人で見に行け！」

二三の女がサーカスごときで人をたたき起こすなと彼は不機嫌そうに言う。

サーカスは嫌いだ。

「ケチ。三十路。さつさと禿げろ」

「ゴルア！ 誰が三十路だクソガキ！」

「事実。三二歳、独身、彼女居ない歴年齢」

「なっ……何故それを……」

「マスターが言ってた」

「人の気にしていることばかり……」

アラストルは頭を抱え込んだ。

「アラストルはお嫁さん貰わないの？」

「知らん。ってか何でいちいちお前に報告する必要がある？」

「保護者だから？」

「どっちが？」

「勿論私」

嘘付け、とアラストルは玻璃の頭を枕で軽く叩く。

「ったく……起こされちまったものは仕方ねえ。サーカス連れてつてやるから大人しく朝飯の支度手伝え」

「うん」

玻璃は沙羅双樹の花が咲くように笑った。

巡回サーカスは彼女の姉、朔夜のものだと言うのに、彼女は心から嬉しいのだろう。

「今度はね、シエスタのトレアドールが入ったんだって」

「ほう」

「牛と戦うのかな？」

「牛？ ライオンの間違いだろ？」

アノサーカスで牛ですむはずが無いとアラストルは考える。

「いつそ魔術師との対決かも知れねえぞ？」

「それじゃつまんない」

「まあな」

それなら闘技場へ行ったほうが楽しめる。

「ほら、行くんだろ？ もたもたするな」

アラストルは邪魔になった長髪をそこらへんにあった紐で括って上着を羽織った。

「うん」

正直、サーカスには嫌な思い出しか無いアラストルだが、嬉しそうに笑う玻璃を見て、妹の姿を思い出す。

一瞬、鮮血の記憶が蘇るが、嬉しそうな玻璃を前にそんなことを言うわけにはいかない。

「どうせお前はライオンが見たいだけだろ？」

「違う。今度はライガーが入ったって」

「ライガー？ 何だ？ それは」

「トラとライオンの子供だって」
鮮血の記憶を振り払う為、あえて話題を変える。
けど不安は消えない。
アラストルは警戒を強めた。

スピード 主章？

ムゲットは賑わっていた。

こんな日は、親は酷く警戒する。

何せ犯罪大国だ。誘拐や殺人も多い。賑やかであればあるほど暗殺者は仕事をしやすく、浮かれた人間が多ければ多いほど誘拐も容易い。

「嫌になるほど賑やかだ」

スピードは呟く。

別に遊びに来たわけではない。

仕事がある。

いや、仕事と言うには少し語弊がある。これは個人的趣味の範疇だ。

月の女神の愛する少女を探す。それこそが彼の目的だ。

月の女神、つまりディアーナはセシリオ・アゲロの崇拜対象であり、彼とその部下を護るとされる紋章のモデルの神話だ。

それはあくまで神話の世界であり、既に信仰などと鑄物が消え去ったこの国では何の意味も示さない。いや、月の女神と言えはすでにセシリオ・アゲロの権力の象徴としての認識しかない。

その女神の寵愛を受けた人物を探すことは雲をつかむどころではない。霧を捕らえるような話だ。

「単純に考えれ、朔夜が怪しいと思うのですがねえ」

忌々しい師匠。時の魔女の話では朔夜ではないと言うことだ。けれども彼女に愛され、そしてディアーナの寵愛を受ける。

「女神の加護を受ける？」

随分昔にセシリオがそんなようなことを言っていたことを思い出す。

「アラストル、こっち、こっち」
「おい！ 迷子になるぞ！」

すれ違う銀と黒。騒がしい。
スピードは溜息を吐く。

「浮かれきっていますね。観光客でしょうか？」

カモ以外の何者でもない。

そう思ったがやめた。

あんな馬鹿に関わればこちらまで同じ部類に入れられそうだ。

スピードはすれ違った二人のことを記憶から追い出し、先を急ぐ。

向かう先は大聖堂だ。

別に信仰心があつてのことではない。

ただ、あの屋根はとても見晴らしが良いのだ。

月の女神の寵愛を受けた少女の姿を垣間見ることができるかもしれない。

「まあ、無駄足の可能性の方が高いですがね」

「そうでもないわよ？」

独り言のつもりが返答があつた。

驚いて見上げると、先客が居た。

「師匠、どういう意味です？」

「そのままの意味よ。カトラス」

「その名で呼ばないでください」

「あら、ごめんなさいね。スピード」

嫌な人に会った。

スピードは今すぐこの場を去りたいと思つたが、目の前の女はとて
もそうはさせてくれそうに無い。

「何をしにきたのですか？ 師匠」

「サーカス見物よ」

「嘘をおっしゃい」

「嘘じゃないわ。ライガーなんて珍しいもの」

「貴女に珍しいものがあればこの世から珍獣は消え去ります」

「まあ、失礼しちゃう」

彼女は楽しそうに笑う。

外見ばかりは年頃の娘だが実年齢はスペードのそれより遙かに上。彼女は七百年の時を生きる魔女だ。

「そろそろ歳を考えたらどうです？　いつまでも若作りされてはむしろ不気味としか言いようがありません」

「こら、レディに年齢の話をしてないの」

「トラディショナルレディの間違いでしょう？」

「ばああの間違いだろ。」

内心呟いたが口に出せば拷問まがいの「お仕置き」の他に昔の話をいろいろと持ち出される厄介な女が相手なので必死に耐える。

「それで？　目的は何です？　師匠」

「それはあなたが知っているわ。スペード」

あなたと同じ目的よと彼女は言う。

「おや、随分賑やかですね」

「あら、セシリオ、久しぶりじゃない」

スペードは突然現れたセシリオに驚きつつも神出鬼没は彼の専売特許であったことを思い出し、知らぬふりをすることにした。

「時の魔女までお出ましとは、今年の祭りは面白いことになりそうですね」

「そうね。でも、楽しいことだけじゃないみたいよ」

彼女はそう言いながら大聖堂からそう遠くない武器屋を見る。

「なにかありますか？」

どうせからかっているだけだろうと高を括りながら視線を追えば、見事に建物が爆発した。

「なに？」

「リヴォルタの仕業ですね」

「こんな計画は聞いていません」

「やっぱりあなたはリヴォルタじゃないですか」

「黙りなさい。それより……師匠、それを貸してください」

彼女が覗き込んでいた望遠鏡を奪い取る。

「こら、もうっ、貴重なものなんだから壊さないで頂戴ね。一応商品なんだから」

「だったら後で買い取ります」

真実のレンズを埋め込まれた望遠鏡はあらゆる魔術も無効化して映し出す。

「……ランデッロ……」

「知り合いですか？」

「ええ。芸術家気取りのいかれた男ですよ。芸術は爆発だとか言っ
て勝手に爆破事件を起こしてくれる。先日のスラムでの爆発沙汰も
あの男の仕業ですよ」

スピードは忌々しそうに言う。

「困った坊やよ。もともとはオルテインシアの花火職人の息子だっ
ただけけれど、こっちに來てから螺子が外れたように爆発沙汰ばっ
かり起こすの」

「ええ、お蔭でテーラの名画もディセイニヨの貴重なステンドグラ
スも灰に変わってしまいましたよ」

「最近じゃ陛下直々に指名手配に加えられたわ」

魔女は呆れたように溜息を吐く。

「困りましたね。このままでは僕の可愛い奥さんのショーが台無し
になってしまいます。あの男は殺しても？」

「構いませんよ。邪魔なだけです。ああいう無能は」

計画の邪魔だ。

スピードにとってランデッロはそれ以上でも以下でもなかった。

「気をつけなさい、セシリオ。あれでも魔術師の端くれです。繊細
な術は使えませんが派手な魔術を好んで使います」

「へえ」

「特に炎や爆発を好みます」

「容易に想像できますね」

「ええ」

セシリオは愛用のナイフを遊びながらランデッロを見据える。

「ここからでも十分に届きそうですが……万が一反撃されるとこの建物が台無しになりそうですね」

「おや？ 反撃の隙を与えるつもりですか？」

「まさか。でも用心は必要ですよ」

「今なら五十万リラで私が防御魔法を施してあげるわよ？」

「結局商売ですか？」

「稼ぎ時ですもの。稼いでおかないと」

笑顔で言う彼女にスピードは溜息を吐く。

「仕方ありませんね。僕の可愛い奥さんと娘の為ですから」

セシリオはそう言ってポケットから金貨の入った袋を取り出し魔女に投げつけた。

「百万は入っていますよ」

「まあ、随分気前が良いわね」

「ついでにサーカス周辺にも防御魔法をお願いします」

「ああ、そういうことね。お安い御用よ」

そう言って魔女はどこからか石を取り出し屋根の上に配置する。

「じゃあ、私はサーカスのほうに居るわ。大聖堂の建物自体の安全は保障するけど、あなたたちの身までは保障していないから自分の身くらい自分で護りなさい。まあ、殺しても死なない人たちだから平気だと思うけど」

彼女はそう言って屋根から飛び降りる。

下を見ても既に人混みに紛れてその姿を探すことは出来ない。

「相変わらずですね。あの女は」

「全くです」

二人は深く溜息を吐いた。

アラストル 間章？

目の前には巨大な獣が堂々とした様子で歩いている。

ライガーというその獣は、玻璃の視線を釘付けにして離さない。

「ねえ、後で触らせてもらえるかな？」

「……食われるぞ？」

アラストルは溜息を吐いた。

もう何度目になるか分からない溜息を。

玻璃に付き合ってサーカス見物に来たものの、この人混みの中にスリや誘拐犯や暗殺者がうじゃうじゃしていると思うと心底うんざりした。

先ほどから執拗に玻璃に卑しい視線を送っていた男はすれ違いざまに気絶させておいたし、財布を狙ってきたガキには拳骨を食らわせた。

それでも玻璃は気付かないようでただ目の前の獣に目を輝かせている。

「浮かれすぎだ」

「サーカスは浮かれるためにあるんだよ」

玻璃の言葉は尤ものように聞こえるが、このクレッシェンテにおいてはそうであってはいけない。

「もう少し警戒しろ。俺たちは一応狙われる側の人間だ」

「大丈夫。私半化けだから」

「そういう問題じゃねえ」

その中途半端に丈夫な体が油断を生み出してるんだと彼は玻璃の頭を軽く小突いた。

「痛い」

「痛覚は存在するんだろ？ 永久拷問なんてことになりかねないぞ」
「それは嫌」

「だったらもう少し警戒しろ」

アラストルはもう一度辺りを見回す。そこら中に嫌な気配がある。どうも悪い予感がする。

これは長年剣士として戦ってきた己の最も信頼できる直感が告げるものだった。

「玻璃、帰るぞ」

「嫌。折角来たのに」

「もう十分だろ。それより何か起こる前に帰るぞ」

「何かって？」

「さあな」

酷く嫌な予感がすることだけは確かだ。不穏な気配がある。

アラストルは玻璃の手を引いて歩き出す。

「嫌」

「早くここを離れるぞ。何か居る」

「え？」

「嫌な臭いがするんだよ」

アラストルは鼻をひくひくと動かしながら言う。

「……火薬の臭いだ。出来るだけ離れるぞ」

アラストルは無理やり引きずるように玻璃の手を引き、走り出す。向かうは王宮。

クレッシェンテで一番危険で、一番安全な場所であった。

スペード 主章？

馬鹿笑いしているランデッロにレンズを向ける。

「ランデッロ、どういふつもりです？」

「年に一度の祭りだ。盛り上げてやろうと思ったのさ」

「余計なことを」

空気の読めない男だ。スペードは溜息を吐いた。

「貴方は既に我々にとっても邪魔だ。消えてもらいましょう」

「ふん、俺はもう、お前には従わない、カトラスA。お前と言い、クオーレと言い！ 上から目線で命令ばかりしやがって！ その上芸術を理解しねえ！ 弾け飛べ！」

起爆瓶を投げつけられるが、結界で防ぐ。

「僕は、魔術師ですよ？」

スペードは冷やかな眼でランデッロを見た。

「僕も、お忘れなく」

「げ、セシリオ・アゲロ……何でてめえが……」

「僕の可愛い奥さんの邪魔をするものは何人たりとも生かしてはおきませんよ」

「てめえが女に現を抜かしてるっつーのは本当だったんだな」

ランデッロは卑しく嗤った。

「黙りなさい。さて、どうやって殺してやりましょうか。ねえ、スペード？」

「そうですね、いつそ両腕と脚を切り落としてそのまま生かしておくというのはどうです？ この男は僕らとは違って切り落とした部位が再生することは無い」

「名案です。どこから切り落としましょうか？」

二人が話を進めていくと、ランデッロの顔は青くなる。

「右腕からいきましよう。手伝いますよ。セシリオ。僕もこの男が気に入らなかったところです」

「武器は？」

「そうですね。これで十分でしょう」

そう、スペードは足元に転がっていた小石を拾った。

「そんな石ころで何が出来るんだよ」

「おや？ 僕は魔術師だと言ったはずですよ」

スペードは石を両手で包み、なにやら呪文を唱える。

すると石は剣と砂に変わった。

「おや、あまり質は良くないようですね」

「落ちている石ならそんなものでしょう。貸してください。僕は早く切り刻みたくてうずうずしているんです」

「自分の武器があるでしょう。セシリオ」

「こんな小さなナイフでじわじわやれと？ まあ、それも好きですが……たまには思いっきりぐさりとやりたいときもあるんですよ」

セシリオは玩具を前にした子供のように目を輝かせ言う。

「仕方ありませんね。下半身は残して置いてください。指を一本ずつ切り落としてから脚を落としますから」

「ええ。解っています。ああ、逃げそうですね」

ランデッロが背中を向けたと同時に、セシリオはナイフを投げた。ナイフはランデッロの服を壁に縫いつけた。

「これで逃げられません。さて、ぐさりといきましよう」

セシリオは楽しそうに笑い剣を構える。

真つ青なランデッロとは対照的に、スペードは楽しそうにその状況を眺めていた。

ムゲットに、男の悲鳴が響くまで、そう長くは掛からなかった。

ユリウス 副章？

「ラミエル、騒がしいけど何事だい？」

「今日はサーカスが来ていますからね。町中お祭り騒ぎですよ」

「ふうん」

宮廷騎士団長ユリウスは書類に目を通しながらさもどつでもよさそうに返事をした。

「騎士団長はサーカスを観たりしないんですか？」

「興味ないな」

「えー、面白いのに」

「いいから、仕事しなよ」

彼がそう言った瞬間だった。

外に爆音が響く。

「……リヴォルタか」

「起爆瓶ですね。そんなに大きくない」

「相変わらず耳は良いね。行くよ」

「えっ？ は、はいっ」

不機嫌な騎士団長は剣を取り、部屋を出る。

「カアーネ」

「はい」

「僕は少し外を見てくる。ラミエルもだ。君は陛下のお傍に」

「はい。リヴォルタの仕業と考えてよろしいのですね」

「ああ。少なくとも僕はそう考えている。ラミエル、爆発があったのはどっちだい？」

「大聖堂の方です」

「解った。行くよ」

不機嫌そうに彼は廊下を歩く。

このときばかりは広すぎる宮廷を恨む。

「人数は？」

「……爆発を起こしているのは独りだと思えます」

「じゃあ、他にも誰か居るってこと？」

「爆発を防ぐ人と、あとは何だろう……凄く嫌な感じの人が居ます」
使えない。

彼は思った。

この少年は戦いにはまず使えないが、異常な聴覚を持っている。
情報収集には利用できると考えていたが、正確な人数を把握できない
のであれば足手まといになると判断した。

「君、留守番する？」

「え？ でも……」

「まあいいや。ついておいで」

万が一逃げられた時には追跡にこの少年の能力が必要になる。

彼は足早に廊下を進む。

少年は置いていかれないように、必死で後を追った。

アラストル 間章 ？

王宮もまた騒がしかった。

「おい、何が起こってる」

「黙れ、ここから先は立ち入り禁止だ」

白い女。番犬が門の前で吼える。

「カアーネ、こいつだけでも無事なところに避難させたい」

「馬鹿者。我々宮廷騎士は陛下こそが最優先だ。今この混乱の中、一般市民を王宮に入れることになれば混乱に乗じて悪事を働くものが出るだろう」

女は吼えるようにいう。本当に犬のようだ。

「お前、強いかな？」

「貴様に負けるほど弱くは無いつもりだ」

「なら、こいつを預かってくれ。様子を見てくる」

アラストルは玻璃を指してそう言った。

「どういふつもりだ？」

「広間で爆発があった」

「貴様が行く必要は無い。既に宮廷のものが様子を見に行った」

「……そうか。なら、騒ぎが止むまでここに居させてくれ」

「門前に立つな。通りの北に居ろ。其処までは爆発も届きはしないはずだ」

「ああ」

番犬、ミカエラ・カアーネは探るようにアラストルと玻璃を見た。

「アラストル、この人だれ？」

「カアーネだ。宮廷看守長だが、宮廷の誰よりも王に忠実で外敵を見つけ出すことに優れている。まさに番犬だ」

「番犬……ピアノコ！」

「そう、呼ばれることもある。ほら、子供は早く避難しろ」

「子供じゃない！」

玻璃はアラストルの後ろからそう叫んだが、アラストルは彼女をつまみあげるように抱え込んで北側へ進んだ。

宮廷のものが安全といったからといって安全とは限らない。

だが、門前が危険になることは確かに理解できた。

「玻璃、大人しくしてくれ」

「うん」

玻璃は不満そうではあるものの大人しく頷く。

アラストルはただ、遠くを見渡し、それから深い溜息を吐いて、瞳を閉じた。

ユリウス 副章？

宮廷騎士団長ユリウスがその場に辿り着いた時、血の海があつた。おそらくは人間であつたであろうものは既に原型を留めず、ただ、肉の破片のようなものへと姿を変え、乾いた赤黒い塗料が街の景観を損ねている。

「ラミエル」

「はいっ」

「清掃員を増員して直ぐに片付けさせて」

「はい」

汚い。醜い。

彼が考えるのはただそれだけ。

「陛下がこの様子をご覧になられたらさぞ悲しまれるだろう」

「どうしてですか？」

「君はそんなことも分らないのかい？ 美しい街並みがこんなに醜いもので汚されたからに決まっているだろう」

血はなかなか落ちないんだと彼は言う。

「裏路地でやればいいものを何でこんな目立つ場所で……」

彼は深い溜息を吐いた。

「にしても、一体どんな武器を使つたんでしょうね」

「さあね。どうせ魔術師か何かの仕業だろう？ 人間の仕業じゃない。みてよ。力で無理やり潰したみたいだ」

ジルは興味なさそうに足元の塊を指す。

「犯人はもう居ない。無駄足か。さつさと片付けないと、明日は陛下が視察にここを通られる。ラミエル、血痕一つ残さず綺麗に片付けてよね」

「はいっ！ 任せてくださいっ！」

ラミエルは元気良く返事をする。

この言葉に偽りは無い。彼はこの国の誰より「掃除」が得意だ。それこそこの場所で何事も無かったかのように綺麗に片付けてくれることだろう。

ジルは退屈そうに空を見上げた。

「騒がしい」

サーカスの派手な音楽は既に聞こえない。

代わりに人々の悲鳴のようなものが響いている。

「うるさいよ」

犯人を捜さないと。

けれども手がかりは無い。

「厄介だよ。詐欺師風情が」

あの男の仕業に違いない。

証拠こそ無いにせよ、彼には確かな確信があった。

ラミエルは不思議そうに上司を見つめる。

「何？」

「い、いえ」

「急ぎなよ」

「はい。直ぐに」

急かされ、直ぐに仕事に取り掛かる部下を、ジルは退屈そうに眺め、大きな欠伸をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2182o/>

藍の魔術師と月の女神

2011年10月24日15時10分発行